歴史学者
甲南大学名誉教授

# 井野瀬（いのせ） 久美恵（くみえ）さん

## 過去とつながり、今を問う ①

人間発見

**過去とつながり、私たちの今を問い直してほしい――。甲南大学名誉教授の井野瀬久美恵さん（68）は、近代英国史を専門とする歴史学者だ。近著「奴隷・骨・ブロンズ―脱植民地化の歴史学」では、連綿と続く人間の営みの上に現在はあり、過去を知ることなく、未来は創造できないと説く。若い世代に期待するのは、過去と現在の分かち難い関係を意識する姿勢だ。**

過去は「過ぎ去る」と書きますが、なくならないし、終わってもいない。つまり、過ぎ去らないのだ、と学生に伝えてきました。歴史は「過去と現在の対話」。過去の出来事は現在の問いにより意味を変え、私たちは常に今の立場から過去を読み直します。

本書は若い世代との対話を想定し、出版社のWEBマガジンに連載したエッセーをまとめたものです。過去が突如として現在に立ち現れ、知識・情報に大きな地殻変動を起こす事例を見ながら、歴史学における「知の脱植民地化」（西洋中心の知識体系からの脱却）について考えました。

# BLM運動に注目 ■「知の脱植民地化」考える

事例の一つは、2020年に米国で黒人男性が警官に殺害された事件を機に、世界的に高まった運動「ブラック・ライブズ・マター（BLM＝黒人の命は大切）」です。

英国の港町ブリストルでは、慈善家として記憶されてきた17世紀の名士のブロンズ像が、民衆によって引き倒されました。奴隷商人だった過去が現在に呼び起こされたのです。BLM運動の広がりは奴隷制の歴史を可視化し、世界各地で同種の像の撤去が進みました。

**欧米などの博物館を揺るがす「ベニン・ブロンズ」の返還問題も、同じ文脈の中で注目を集めている。**

ベニン・ブロンズは、19世紀末、西アフリカのベニン王国（現在のナイジェリアの一部）を襲撃した英国軍により、王宮から略奪された美術品です。贈与や売買を通じて各地に分散しましたが、21世紀の今、それらの返還問題に各国の博物館は揺れています。

大英博物館はこれまで収蔵品の返還には一切応じず、博物館こそが「最も安全な居場所」と主張してきましたが、BLM運動の拡大で見直しを迫られました。重要な収蔵品の寄付の原資が奴隷制によるものだと指弾されたのです。

「奪われたものは、どこにあるべきか」という問いは、倫理の転換を促す、世界的・同時代的な動きです。日本でも現在、研究目的で収集した琉球やアイヌ民族の遺骨や文化財の返還、謝罪が進行中です。このプロセスをもっと多くの人と共有できたらいいなと思います。

**24年9月に人間文化研究機構の監事に就任した。**

2つの大学で教員を40年近く続けてきました。今も甲南大で授業を持っていますが、24年7月に区切りとなる最終講義を行い、神戸市内の大学から、国立民族学博物館（民博、大阪府吹田市）の館内にある監事分室に移りました。

所属している人間文化研究機構は国立の研究機関を束ねる大学共同利用機関法人の一つ。民博など人文系の6機関を所管し、私は業務全般を監査する常勤の監事です。大学の執行部や学部長、日本学術会議の副会長など、研究と組織マネジメントの両面の経験があり、それを生かしてほしいということでしょう。

年に1回作成する各機関の報告書は「読まれてこそ意味がある」と考えています。読んだ上で活発に議論し、機関の運営に生かしてほしいのです。各機関の館長、所長のリーダーシップについても具体的に分析した報告書は、幸い、面白いと評判でした。歴史記録を読み、人間の記憶を言語化する研究者の仕事と、執筆のマインドは同じです。

（編集委員 影井幹夫が担当します）

**略歴** 1958年愛知県生まれ。京都大学大学院博士課程（西洋史学専攻）単位取得退学。博士（文学）。甲南大学助教授、教授を経て、同名誉教授。2014～17年に日本学術会議副会長。24年から人間文化研究機構監事。

歴史学者
甲南大学名誉教授
# 井野瀬（いのせ） 久美恵（くみえ）さん

## 過去とつながり、今を問う ②

人間発見

**名古屋近郊の愛知県津島市で生まれた。父の転勤に伴い、幼少期から転校を重ねた。**

父は高度経済成長期の商社マンでした。転勤が多く、引っ越しばかり。幼稚園で父の実家があった津島から横浜へ。小学校で津島に戻り、さらに兵庫県芦屋市へと転居しました。今だったら単身赴任という選択肢もあるんでしょうけど、当時は家族そろってというのが当たり前。おかげで、私は2つの幼稚園、3つの小学校に通いました。

転校生というのは、受け入れる側にとっては異分子なんですね。幼稚園から小学1年までいた横浜では名古屋弁をからかわれ、小学4年で津島から芦屋に移ると、そこも全くキャラの違う関西弁があふれる世界でした。当初はつらいことも多く、逃げ込む先を見つけるのに必死でした。

最初に私の居場所になったのは、学校の図書室でした。ここにいたら静かだし、誰にも邪魔されない。転校生にちょっかいを出してくる子たちがいない空間で、好きな本の世界にひたれたのです。

# 転校生、図書室に避難 ■ 読書で広がる「世界」

もともと伝記ものが好きでしたが、高学年になると推理小説にはまりました。ガストン・ルルーの「黄色い部屋の謎」という古典を読んで、世の中にはこんな面白いものがあるのか、と驚いたのです。図書室の本を次から次へと読み、お小遣いで文庫本を買うようにもなりました。

**小中学校時代はひたすら本を読んだ。知識を蓄積していく楽しさに目覚め、勉強も苦にならなくなった。**

友人関係を深めるより、本を読んでいた方が楽だったし、本は読めば読むほど、どんどん世界が開けてきます。知らなかったことが自分の中にプールされ、知識と知識がつながっていくのもすごく楽しい。そのなかで勉強が苦にならない感覚も身についていきました。

転校すると、授業の進度が違いますよね。芦屋に引っ越した時は、同じ学年とは思えないほど先まで進んでいました。でも、じきに追いつき、成績も上がる。すると一目置かれるというか、いじめられなくなる。転校生ならではの感じ方ですが、勉強が一つの武器になって、私を守ってくれたわけです。

私が今のような、何事もプラスにとらえる、楽観的で自由な考え方になったのは、この頃の経験が大きい。いじめなどがあっても、ずっとは続かない。潮目が変わるときはきっと来るはずです。私の場合、そういう変化を感じたのは、本を読むことによってでした。

**大学受験の直前、大けがを負った。私大に願書を出せず、高校教諭の勧めで京都大学を受けた。**

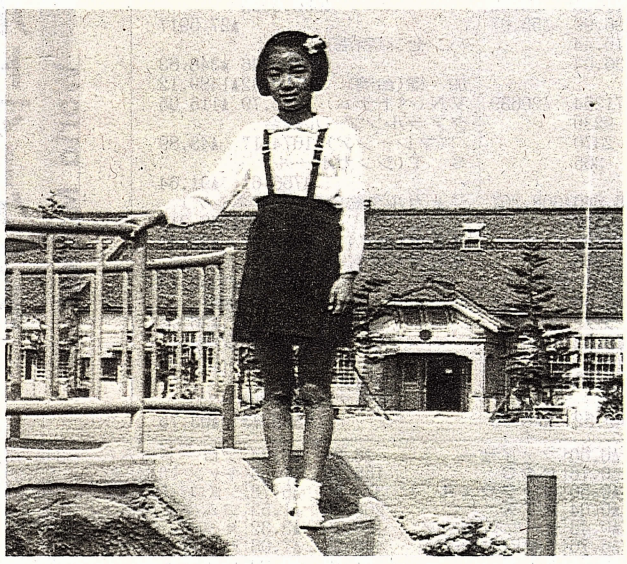
実は高校でも転校しています。芦屋から大阪府箕面市に転居した際、編入試験を受け、大阪府立豊中高校に移りました。もうすぐ大学受験という高校3年の12月、校内スポーツ大会があり、左足のアキレス腱（けん）を切ってしまいました。松葉杖を使って学校や病院に行くだけでも大変で、私大に願書を出すことまで頭が回りませんでした。

国立の入試はまだ共通1次の導入前で、一期校、二期校に日程を分けて行われていた時代です。私の第1志望は二期校の東京外国語大学。父のようにビジネスの世界で働く将来を描き、ラテンアメリカで通じるスペイン語を学ぼうと考えていたからです。

ただ、高校の先生は、チャンスがあるから一期校も受けとけ、と。言われるがままに京都大学を受験し、合格したのですが、振り返ると本当に運がよかった。この後の東京外大は、みずぼうそうで試験を受けられなかったんです。

学びたいことが特にあったわけではないのですが、扉を開けてみると、意外や意外、大学での学びは面白いものでした。私は今でもメモ魔なのですが、教室の一番前に座って、うなずきながら必死にペンを走らせる私の姿に気づき、「なんか面白いのがいるぞ」と思った先生もいらしたようです。

（編集委員　影井幹夫）



転校直前、愛知県津島市の小学校で。父の転勤に伴い、小学校時代は2度転校した（1968年）

歴史学者
甲南大学名誉教授
# 井野瀬（いのせ） 久美恵（くみえ）さん

## 過去とつながり、今を問う ③

人間発見

# 民衆の足跡にひかれる ■ 論文執筆、傍らには猫

**京都大学では当初、英文学専攻だったが、学士入学で西洋史学専攻に転向することになった。**

大学で最初に専攻したのは英文学で、4回生になって卒業論文の題材として取り上げたのは、トマス・ハーディの「カスターブリッジの町長」という作品でした。ハーディは、19世紀後半～20世紀初頭にかけて活躍した英国の作家で、民衆の日常の生活や慣習をとても丁寧に描いたのが特徴です。

作品には、民衆レベルでの離婚である「妻売り（ワイフセール）」や、私的な秘密を暴露して裁いた民衆の儀式「シャリヴァリ」など、19世紀の英国に残っていた共同体の慣習が登場します。私は社会史、民衆史という文脈を入れて論文を書いたのですが、対する評価は最悪なものでした。英語はよく書けているが「英文科の卒業論文ではない」と言われたのです。

じゃあ何なんだ、とひどく落胆しました。後に恩師となる西洋史の越智武臣教授に相談してみると、「歴史だったら何でもできるよ」「うちに来たら」と言ってもらいました。その言葉に背中を押されるように、史学科の西洋史学専攻の3回生に学士入学したのです。

卒論へのダメ出しがきっかけで、新しい研究動向も見えてきました。ちょうどその頃、文学研究や歴史研究の世界では、民衆の生活や文化に光を当てる社会史的アプローチが広がりつつありました。これらは私の関心が向く先と重なっていました。

京大では当時、大学院の先輩たちが歴史書の講読会を定期的に開き、学部生を誘ってくれました。振り返ると、私が面白いと思った本は社会史関係が多かったようです。

ある時代を生きた普通の人々は、何を食べ、何を考え、どのように暮らしていたのか。そういう人々の小さな動きは、大きな出来事や事件とどうつながっているのか。そういうところに面白さを感じました。

**大学院に進学した年、航空会社に勤めていた夫と結婚した。**

大学院に進学する前の1年ほどは、将来について真剣に考えました。進学か、就職か。結婚もどうしようかな、と。知り合った当時、夫はパイロットの訓練生でした。

熟考の末、大学院に入って研究者への道を歩き始め、同じ年に結婚もしました。その後、私は関西で大学教員になり、会社の拠点が東京に変わった夫は、単身赴任に。当初は3年ぐらい、という話でしたが、結局、15年以上もの長期に及びました。

とはいえ、夫の単身赴任も悪いことばかりではなく、私は自宅で仕事に打ち込み、単著・共著を含め、多くの書籍や論文を書くことができました。その傍らにいたのは、いつも猫です。

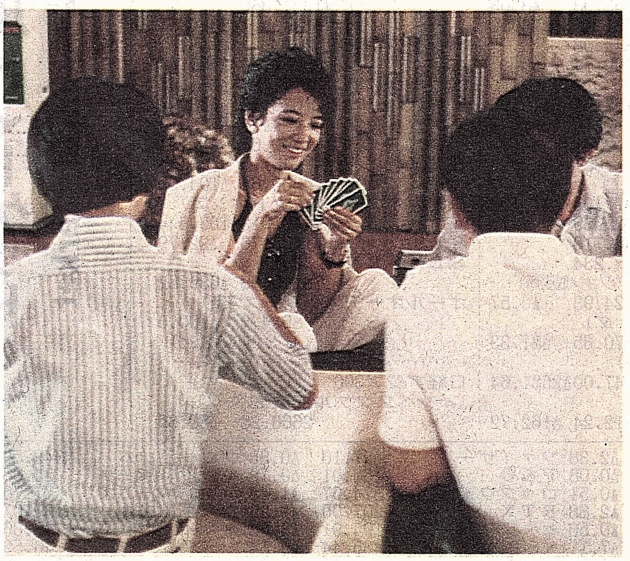
猫は私の人生にとって欠かせない存在です。学生時代から飼い始め、今でも複数の猫が家にいます。いつも絶妙な距離感で、集中して何かを書いたり、読んだりしていると近くに来て、静かに寄り添っていてくれる。個性あふれる彼らは、文字通り、私の同志です。

**修士・博士課程で5年間の大学院生活を送った後、大学教員として職を得たのは30歳だった。**

大学院にいた1980年代半ば、その先の進路としては、高校の教師になるか、大学で職を得るか、という選択肢が一般的でした。その時、私の専門のイギリス近代史で追手門学院大学文学部に公募があり、幸運にもご縁をいただき、88年に専任講師として着任しました。

91年に甲南大学に移りますが、両大学ともに所属したのは英文科です。英文学専攻から西洋史学専攻への学士入学が功を奏したかたちで、英文学と歴史の両方に通じている、というのが私の強みになったのです。卒論にダメ出しされたことが、回り回ってプラスに働くようになったわけですから、人生って面白いものですね。

（編集委員　影井幹夫）



大学院時代、研究会の合宿の合間にくつろぐ（1985年8月）

歴史学者
甲南大学名誉教授 井野瀬（いのせ） 久美恵（くみえ）さん

過去とつながり、今を問う ④

人間発見

# 女性の見た大英帝国 探究 ■ 学生との対話、柔軟に

**大英帝国の時代に世界各国を旅した「レディー・トラベラー」に関心を持つ。**

1990年に出した初の単著「大英帝国はミュージック・ホールから」以降、私の関心は一貫して大英帝国という時空間にあります。研究の中心としてきた社会史からさらに一歩進めて、女性たちの目でこの空間を見直そう、と考えました。

目に留まったのは、19世紀後半～20世紀にかけて、アジアやアフリカ、オセアニアなど世界各地を旅したレディー・トラベラーと呼ばれる女性たちです。彼女たちは裕福な中産階級以上の家庭の出身で、日記や手紙を書く習慣があり、多くの旅行記を残しました。明治初期の日本を訪れたイザベラ・バードもその一人です。

彼女たちの著作は90年代に相次いで復刻、分析され、男性探検家の視点とは異なる帝国像が明らかになりました。私が研究したメアリ・キングズリは、19世紀末の西アフリカを探訪しました。男性探検家は現地の人々を「アフリカ人」「黒人」といった集合名詞で表現しましたが、彼女は一人ひとりに名前をつけた上で、彼らとのやりとりをとても楽しげに記しています。

レディー・トラベラーの語り口からは、帝国が掲げた「文明化」「啓蒙」の「してあげる」という姿勢への違和感が伝わってきます。人や物が接触すると、そこには必ず何らかの反応、痕跡が残ります。「してあげた」だけではなく、彼らから受けた衝撃、影響もあったはずです。そこはやはり双方向で考えるべきでしょう。

**学生との距離感は近く、ゼミの指導では自由な発想を尊重した。**

大学の教員になった当時は、学生との年齢も近く、親しく付き合いました。予備校で英語の講師をしていたこともあり、もともと学生を教えるのは好きでした。

我が家に食べ物や飲み物を持ち寄るパーティーもよくやりました。猫のトイレなどの世話をしてくれる学生もいた。調査のために海外に出て家を留守にする間、卒業生にカギを預けて猫の世話をしてもらうこともありました。

ゼミ生から卒業論文のテーマの相談を受けると、できるだけ本人の関心に寄り添い、やりたいものを選べるように心がけました。卒論は後に残るものだし、学生の考えるテーマは時代を映し出します。私は幸い、歴史と文学の両方を学び、大英帝国が専門なのでカバーできる間口も広い。ある程度、何でもテーマにできるのが私のゼミの特徴でした。

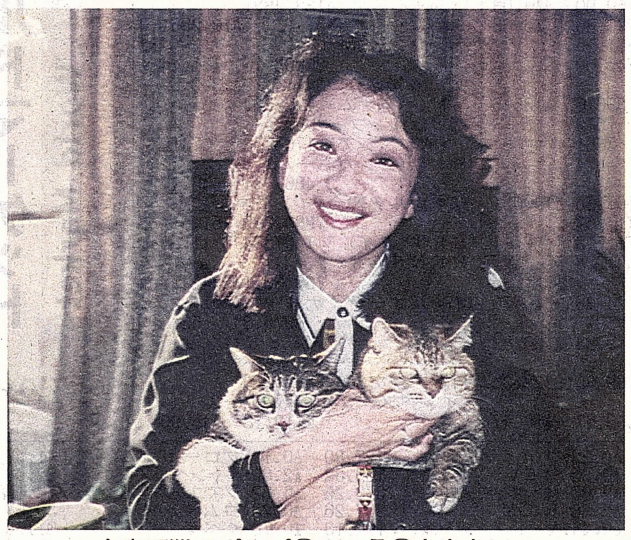
**自宅には本に囲まれた部屋がある。テレビも好きで、仕事の邪魔にはならない。**

論文執筆などの仕事は自宅が中心で、家の中には本があふれています。子どもの頃に憧れた本に囲まれた部屋で、本棚と本棚の間にある隙間に陣取り、じっくり読むのが私のスタイルです。95年1月の阪神大震災では、本が散乱して扉が開かなくなった部屋に猫がとじ込められました。猛省して、今はきちんと耐震補強をしています。

余談ですが、若い頃、テレビを見ながら論文を書ける、という「特技」がありました。実は子どもの頃からテレビは好きで、見ながら勉強もしていました。テレビは今なお、ノイズにはなりません。書いた文章が話し言葉のようだと言われることもあり、初めての単著を恩師の越智武臣先生に贈った際、「行間から井野瀬さんの声が聞こえるようだ」と言っていただけたことは、懐かしい思い出になっています。

そんな私にぴったりの仕事が、大阪のテレビ局、朝日放送の番組審議会の委員です。90年代からずっと続けていて、この10年ほどは委員長を務めています。番組審議会は、放送法によって放送局に設置が義務付けられている機関で、番組の公共性や公正性をチェックする役割があります。毎月出される番組講評という課題は、私にとって楽しい宿題です。

（編集委員 影井幹夫）



自宅で猫のポップ㊧、つう㊨とともに。ポップは阪神大震災の際、部屋に丸一日とじ込められた（1998年3月）

歴史学者
甲南大学名誉教授
井野瀬（いのせ） 久美恵（くみえ）さん

過去とつながり、今を問う ⑤

人間発見

# 21世紀の科学も力に ■ 記録なき声に耳傾ける

**王母像のレプリカに声をかけ、過去と今を考える。**

1年半前から人間文化研究機構の監事として、国立民族学博物館（大阪府吹田市）に拠点を置いています。本館展示場を巡ると、ヨーロッパからアフリカに切り替わる場所に、ベニン王国の王母の頭像がたたずんでいます。これはベニン・ブロンズのレプリカ。私はここでいつも「ごきげんよう」と声をかけます。

ベニン王国があったのは現在のナイジェリアの南西部です。欧州諸国との奴隷貿易で繁栄し、16～17世紀に全盛期を迎えました。ベニン・ブロンズは王宮に飾られた美術品。王や王母、王妃の頭像が多いのは、祭政一致の王国では、死後もそこに魂が宿ると考えられたためです。

1897年、英国軍は外交使節襲撃の懲罰と称して、王宮を攻撃。多くの美術品や象牙を略奪しました。英国に運ばれたベニン・ブロンズは、大英博物館をはじめ、欧米各国の博物館に渡りました。それから120年余り。各国の博物館は今、奪われた品々の返還問題に揺れています。

返還は単純な問題ではありません。ベニン王国の繁栄を支えたのは奴隷貿易。ベニン・ブロンズの材料は、その交易で使われた通貨マニラ（馬蹄〈ばてい〉形の銅や真ちゅう）を溶かしたものでした。

21世紀の科学は、マニラの組成分析から製造地を特定し、18世紀後半～19世紀にかけて、それが英国・バーミンガム産だったことを突き止めました。つまり、英国は奴隷貿易廃止（1807年）の後も、地域通貨を提供するという形で、西アフリカの奴隷取引に関与し続けたことになります。

奴隷貿易は今、「人道に対する罪」と規定されています。では、その対価で作られた美術品は、いったい誰のものなのでしょうか。

**科学技術と歴史学のタッグが過去と現在をつなぐ。**

2011年、カナダ・ケベック州東部の浜辺で複数の人骨が発見されました。骨の組成分析により判明したのは、3人のヨーロッパ人の子ども、主食はジャガイモ、栄養失調などの情報でした。そこから1840年代半ば、アイルランドの飢饉（ききん）を逃れ、カナダを目指した移民船との関連が浮上しました。

記録には、到着直前の船が沈没し、犠牲者を浜辺の墓地に埋葬した、とあります。2016年には付近で新たな遺骨も見つかりました。地球温暖化による海岸の浸食が洗い出した骨は、21世紀の科学技術と歴史学が組んだタッグによって、飢饉の過去を今によみがえらせたのです。

歴史資料は今、デジタル化が進み、奴隷制に関する資料も多くが公開されています。さらにDNA解析技術の進展によって、南北アメリカで暮らす人々と奴隷貿易の過去との関係について、遺伝子レベルで検証した研究なども増えました。デジタルトランスフォーメーション（DX）は、知の脱植民地化の追い風になっているようです。

**時間の物差しを意識し、過去の声に耳を澄ます。**

これらの事例も示すように、過去の出来事は、現在からの問いかけによってその意味を変えます。そして、過去と現在の2点を結んだ延長線上に、未来は見えてくる。私たちに今見えている空間だけで考えるのではなく、時間の物差しをぐっと差し込み、見えない因果関係や連続性を想像し、見ようとすることが大事なのではないでしょうか。

手がかりは、記録された史料・資料だけではありません。歴史においては、記録されなかったものたちの方が圧倒的に多いのですから。行間に潜む、記録されなかった存在を意識し、その声に耳を傾ければ、記録された内容とは異なる中身、物語が聞こえてくるかもしれない。

そんなところから始まる過去との対話の中で、今の世界にも、そこで生きる私たちにも、もうひとつ別の選択肢が見えてくるような気がするのです。

（編集委員　影井幹夫が担当しました）

国立民族学博物館にあるベニン・ブロンズのレプリカ。前を通るときは、いつも声をかける